

# 「ニホンアシカの最後の楽園」：竹島

## 1934(昭和9)年 竹島のニホンアシカ

1934(昭和9)年、今から86年前、大阪朝日新聞に「日本海のアシカ狩」という記事が連載されました。竹島(リヤンコウ群島)で10日間取材し、写真をそえて、竹島の自然やアシカ猟の様子を伝えています。隠岐の島では竹島の漁業権を持っている人の住む久見地区なども訪問し、隠岐の島の自然や伝承についても取材しました。同じ年に大阪動物園で開催された「リヤンコウ島納涼展」では、アシカのはく製や、アシカ猟の写真、竹島の模型などが展示され、多くの人が見学に訪れました。

### 「日本海のアシカ狩」取材日程と関連事項

6月4日	取材班(本社記者 松浦直治、写真班 長谷川義一、大阪動物園 技手 寺内信三(獣医))大阪を出発
	鳥取県境港から発動機船で隠岐の西郷へ
6月9日	西郷から発動機船神福丸(13トン)で竹島へ出発、船長は吉田重太郎、神戸の貿易商中田忠一も乗組む
6月10日	午前8時、島影発見(久見から12時間)、竹島に到着
6月12日	中田忠一、アシカ13頭を連れて竹島を出発
6月22日	取材班、隠岐の西郷に帰着 帰着後、白島(中村)、久見、都万を訪問、久見で八幡長四郎らにも会う
6月28日	新聞に「日本海のアシカ狩」の連載始まる、1回~11回(7月8日)、7月10日から「隠岐の濤声」連載4回(A~D)
7月6日	「日本海の家獣狩講演会」開催
7月下旬	リヤンコ大王が仕留められ、はく製を製作
8月5日	大阪動物園内標本館で「リヤンコウ島納涼展」開催、はく製も展示、20日まで



岩田千虎 (いわた かずとら)氏 (大阪府立農学校教諭で彫塑家)製作の竹島の大模型塑像



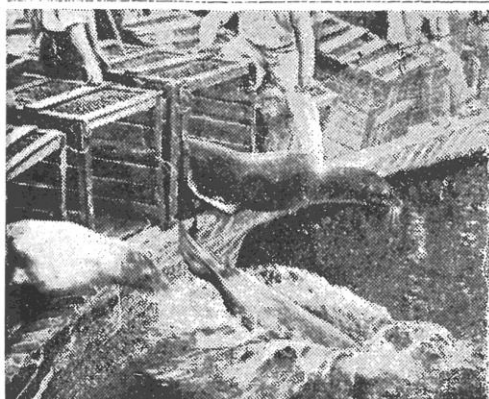
# 生捕ったアシカ13頭は大阪に。 大阪動物園に5頭、阪神パークに8頭

## 孤島のアシカ狩り

### 初生捕りは十三頭

車中で赤ちゃんを生んで

大阪動物園と阪神パークへ



大阪動物園に5頭、阪神パークに8頭

流波の山と立づくる日本海の高只の磯とともには新製物として中一押し寄せる海驢の大群を相手にいま剪りし海驢狩り……本社記者松浦西崎、隠岐長谷川義一、松浦氏と大阪動物園技師寺内三三氏らの一行は島根隠岐郡の孤島リヤンコウ群島で生捕りの壯烈な光景をペンにカメラにさめつゝ、既給生活を積りてゐる、近づく一頭、お目見得させるために生捕つた海驢十三頭を檻にさめて十二日

島を出發、途中隠岐に總みならが伯耆島に無事上陸し、既捕獲車に積み込んで三日間の舟と陸との旅をつつて十五日午前三時大阪動物園に到着した。氷にかまされたい水を浴びせられながら元氣に大阪入りした海驢十三頭のうちをほらんでゐた北海驢が途中進行中の貨車内で月潮して、赤ん坊を生ん

たので中田氏大喜び……親はいづれも六尺ぐらゐ、五十貫餘の大きなやつてギヤア〜とない。何分波が高いが海驢は一萬から破り十數名の仲仕にして三百のトラックに積まれ午前五時すぎまづ五頭は大阪動物園へ、八頭は阪神パークへ運ばれた。

動物園はさつそく新しい海驢池へ入れ大きな目をキョロキョロさせながらうれしそうに得意の泳ぎをひとくさり……おりから入園者は『リヤンコウ群島で捕つたアシカや』と早くも大人氣、また阪神パークでも大きな池に感嘆よく飛びこませ。一般に、お目見得……こゝにはすでに五頭をりこんで一頭十三頭にふたわけで大賑ひである。中田氏談、隠岐に日に探けた中田氏は語る。『御社の人々とともに孤島で餌などを定めてテント生活してゐました。記者の松浦さんも寫眞班の長谷川さんも元氣です。何分波が高いが海驢は一萬から破り十數名の仲仕にして三百のトラックに積まれ午前五時すぎまづ五頭は大阪動物園へ、八頭は阪神パークへ運ばれた。動物園はさつそく新しい海驢池へ入れ大きな目をキョロキョロさせながらうれしそうに得意の泳ぎをひとくさり……おりから入園者は『リヤンコウ群島で捕つたアシカや』と早くも大人氣、また阪神パークでも大きな池に感嘆よく飛びこませ。一般に、お目見得……こゝにはすでに五頭をりこんで一頭十三頭にふたわけで大賑ひである。』

おりから飛び出すアシカ

#### 《動物園では》

さつそく新しいアシカ池へ入れ大きな目をキョロキョロさせながらうれしそうに得意の泳ぎをひとくさり……おりから入園者は『リヤンコウ群島で捕つたアシカや』と早くも大人氣、

#### 《中田さんの話》

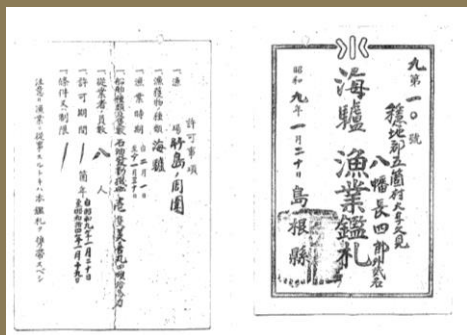
「何分波が高いが海驢は一萬からおります」

\* アシカが1万頭以上もいたことが分かります。

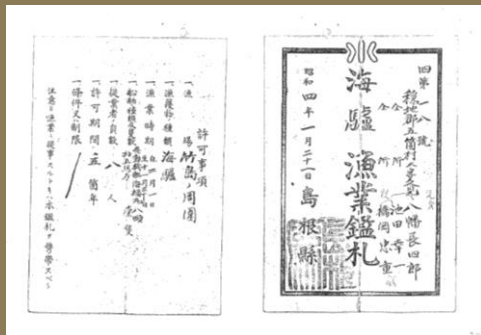
1934(昭和9)年6月16日大阪朝日新聞

\* 大阪動物園は現在の天王寺動物園のこと、阪神パークは2003年に閉園。

昭和9年6月16日の新聞には「同島の漁業権所有者神戸の中田忠一氏」と書かれています。漁業権を持っていたのは、隠岐の久見地区の八幡長四郎さん、池田幸一さん、橋岡忠重さんの三人です。島根県から免許を受けた人に公布された「漁業鑑札」の写しが残っています。



1934(昭和9)年1月



1929(昭和4)年1月



# ニホンアシカはどこに？

日本の周辺には古来からにニホンアシカが生息していました。「日本書紀」や「出雲国風土記」といった古代の本にも書かれ、江戸時代にかけて「ミチ」「ミチノウオ」「トド」と呼ばれていました。

隠岐の、隠岐の島町の白島や、西ノ島町三度（みたべ）では大正時代（1912～1925年）までアシカ猟が行われていました。三度にはアシカを供養する「トド塚」が建てられ、今も地福寺の境内にあります。アシカ猟をしてその皮や油を利用したり、動物園で見る人を楽しませてくれたことへの感謝の気持ちが込められています。

島根県隠岐の島町の竹島はニホンアシカの繁殖地でした。竹島の女島（西島）の洞窟でメスのアシカは赤ちゃんを産み、育てていました。

1904（明治37）年に「りやんこ島領土編入並ニ貸下願」を提出した中井養三郎は、アシカの保護の方法も細かく書いて提出しました。

1934（昭和9）年には10,000頭くらいはいたことが、当時の新聞記事からわかります。漁業権を持っていた橋岡忠重さんの記録では1941（昭和16）年まで、動物園やサーカスに売るために20頭前後を生け捕っていたと書かれています。その後日本人による竹島でのアシカ猟は行われていません。

1951（昭和26）年11月に境高校水産科の朝凧丸が調査に行った時には「アシカが100頭内外」いて、1953（昭和28）年、隠岐高校水産科の鵬丸も竹島でニホンアシカを見ています。

竹島に海洋警察隊が常駐するようになった1954年には、韓国の動物学者の報告をもとに、200～500頭が生息していたと言われていますが、1970年代半ばを最後に、その後は目撃されていません。

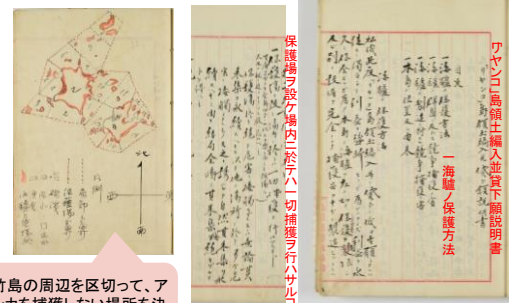
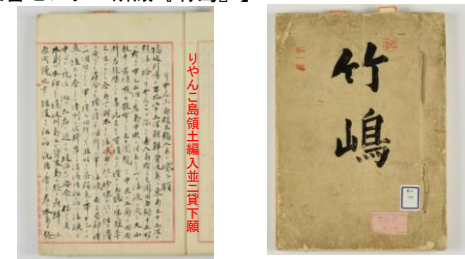
「海驢（アシカ）ノ保護方法」を考えた中井養三郎の願いはかなわず、ニホンアシカは竹島から姿を消してしまいました。

【隠岐郡西ノ島町三度にある地福寺と「トド塚」】



アシカの供養塔「登、塚」(とどつか)＝トド塚

【1904（明治37）年9月29日 「りやんこ島領土編入並ニ貸下願」中井養三郎 / 出典：島根県公文書センター所蔵『竹島』】



竹島の周辺を区切って、アシカを捕獲しない場所を決めていました。

## ニホンアシカはどこに？

どうしてニホンアシカがいなくなったのか、それを考えることは、アシカと人間の関わりを考えることでもあります。わずかに残るニホンアシカのはく製標本や記録には、人間とアシカの歴史が秘められています。ふたたび竹島でニホンアシカの姿が見られることを願っています。